

「夢はそのときの意識の状態と、それに対する無意識の状態との相互作用によって生じるものである。」(河合隼雄 日本に初めてユング心理学を紹介した心理学者)

お断りしておくが、私は夢

## ナビゲーター

分析の訓練を受けてはいない。夢(分析)としたのはそういう理由である。ただ、夢の持つ深遠な魅力に惹かれており、人生の節目や、大きな悩みを抱えた時期に、夢が何を語りかけようとしているの

# 産業カウンセリング理論と私の実践

◆ 17

か、その意味によく考えを巡らせる。私自身が見た夢を紹介しよう。

△戻る時には、水に浸かっている吊り橋の夢▽

木で造られ、どっしりとして幅もあり、行きは難なく渡った吊り橋が、(山の中にある、人一人がようやく渡れるようなフラフラ揺れる吊り橋とは違い、しっかりとした橋である)。戻る時には水に浸かっている。渡れなくなっている。

## 夢(分析)

行きは穏やかな天気だったのに、一転、あたりは真つ暗である。川の水がどんどん増えている。橋の上の方の吊つてある部分につかまって渡っていき何とか戻ろうとする。足の下はゴーゴー流れる黒い水がある。

△数カ月してから見た夢▽

吊り橋の上にいる。向こう岸に着く直前に、帰る時にいつも戻れなくなるのを思い出して、今回はすぐに引き返す。

社会人の息子(初めて登場)が中学生くらいの姿で一緒にいたような気がする。「引き返すよ」と声をかけた。水かさが増え、戻る岸まであともう少しというところであともう少しというところまで来て、足が完全に水に浸かった。水にさらわれないか、すべらないか、大変に怖いのを我慢して、「あともう少し、もう少し」と自分を落ち着かせながら、ようやくたどり着いた。

帰る時には息子はおらず、私一人だった。最初の夢を何度か見るが、いつか戻ることができないまま終わっていた。この時期、私は人生の一大事という事態に直面していた。心情として

出口のない暗いトンネルの中にいるようで、すぐには解決方法がなく、ただ耐えるしかない状況に置かれていた。2番目の夢は、目が覚めてから、水にさらわれないで渡り

切れるかという恐ろしい緊張感が残っていた。しかし、ともかく初めて戻ることができたのである。当時はつきり意識していたわけではないが、この夢を見るあたりから、苦しい状況に自分なりの意味を見出せたように思う。辛い状態にまったく変化はなかったが、これは自分に必要な試練だ、なんとかやっつけていこう、と。

引用・参考文献 河合隼雄 「ユング心理学入門」(培風館、1967)

【産業カウンセラー・公認心理師 安江理世】

(火曜日掲載)

# その不思議さと奥深さ

